

葛藤生起場面における夫婦間コミュニケーション・スタイル

——尺度の作成と妥当性の検討——

岩 藤 裕 美*

Marital Communication Styles in Conflict:

scale development and validity testing

IWAFUJI Hiromi

abstract

This article describes a series of studies on the development and validity testing of the scale of marital communication styles in conflict, self-report and partner-evaluate measures of verbal and nonverbal behaviors against spouses' demands. Pilot studies were conducted in order to determine the situation that triggers conflict and the items of the scale. Then the data provided by 366 married couples (the matrimonial duration ranged from 0 to 15 years) was submitted to factor analyses. A four factor model explained 59.9% of the variance in self-rating and 62.5% in partner-evaluation, labeled soothing, coercion, constructiveness and inattentiveness respectively. A confirmatory factor analysis using data from 228 couples expecting their first child confirmed the structure of the model, which demonstrated that the scale has good concurrent validity across couples with/without children. Testing the discriminant validity of the scale regarding associations with adult attachment styles, most items discriminated clearly between spouses high and low in adult attachment dimensions (relational anxiety/avoidance): significantly higher "coercion" and "inattentiveness", and lower "constructiveness" of the marital communication styles were identified in high anxiety/avoidance groups than in low counterparts. Wives did not show, however, significant effects between high and low avoidance groups.

Keywords : married couples, marital communication, communication styles, scale development, validity testing

問題と目的

夫婦という関係を営みはじめたころの強い愛情が、いつしか消えてしまうことは少なくない。このような夫婦の関係性の変化や、夫婦がいかにお互いの関係を築き上げているかは、夫婦間のコミュニケーションに反映されると考えられる。離婚率の高い米国においては、1970年代より、いかに夫婦が互いの違いに対処していくかということが夫婦の関係を発展させ永続させる重要な要因であるとの観点から、夫婦間におけるコミュニケーションを主題とする実証的研究が進められてきた。そして、配偶者の否定的な言動の出現から夫婦間の心理的苦痛が生じることを主張した Jacobson & Margolin (1979、但し Huston, Caughlin, Houts, Smith, & George, 2001に

キーワード：夫婦、夫婦間コミュニケーション、コミュニケーション・スタイル、尺度の作成、妥当性の検討

*平成13年度生 人間発達科学専攻

て引用)を初めとし、その後多くの夫婦間コミュニケーションについての知見が集積されてきている。

それによると、対立などの否定的なコミュニケーションが少ないことが夫婦の親密感を強めることや (Noller, Feeney, Bonnell & Callan, 1994)、夫では妻の対立を避ける行動が結婚満足感と関連するのに対して、妻では夫の対立的な応答が満足感と関連するといった性差 (Roberts, 2000) などが報告されている。また、どちらか一方の要求に対して他方が話し合いを避けようとする「要求-回避型コミュニケーション」(Christensen & Shenk, 1991) が強い心理的苦痛を抱える夫婦に特徴的であり (Heavey, Layne & Christensen, 1993; Gordon, Baucom, Epstein, Burnett & Rankin, 1999; Caughlin & Huston, 2002)、このようなコミュニケーションの様式が、時の経過と共に関係の崩壊へとつながることが見出されている (Gottman & Krokoff, 1989)。

我が国における夫婦のコミュニケーションについての研究はまだ少ないが、尺度の作成や夫婦の関係性との関連が検討されてきた。例えば、平山・柏木 (2001) は中年期の夫婦を対象としてコミュニケーション態度を測定する尺度を作成し、夫と妻のコミュニケーションにおける差異を検討している。また、永田 (1997) は交流分析の理論的枠組みである自我状態を援用したコミュニケーション・スタイル尺度の開発を行い、夫婦生活に対する満足感との関連を検討している (永田, 1999)。さらに、夫婦間のコミュニケーションの量及び配偶者への自己開示と夫婦関係の満足感との関連を検討した伊藤ら (2006) の研究がある。

しかしながら我が国における研究は、尺度項目に夫婦の親密性と明らかに関連すると思われる項目が混在するために、例えばコミュニケーションの関係性への効果を検討するには不適切であるように思われるし、またコミュニケーションが生起する状況を特定していないために夫婦の関係性が日常のいかなるやりとりによって築かれているのかについての知見に乏しいように思われる。夫婦の関係が、夫婦間の対立や否定的な感情を生じさせるような出来事の発生やそれが継続されることによって影響を受けると考えると (cf. 心理的苦痛発生モデル: Emergent Distress model, Huston et al., 2001)、このような状況は親密性を深める機会でもあり (Pietromonaco, Greenwood & Barrett, 2004)、たとえ否定的な感情を生じさせるような状況があったとしても、そこで建設的なコミュニケーションがなされれば関係をより深めるということも可能となる。Dixson & Duck (1993) は、コミュニケーションが単なる意思伝達の媒体にとどまらず、人間関係を生成し、関係における意味を構築していく力を有するものであると述べているが、葛藤場面はこのような人間関係の生成の場を生み出し、そこにおけるコミュニケーションを測定することによって夫婦がいかに危機に対処し、関係を築いているかを知ることが可能になると考える。

ところで、このような夫婦間の葛藤場面におけるコミュニケーションに関連する要因の一つとして、成人愛着様式が挙げられる。Bowlby (1969/1997) によって提起された愛着理論は、近年、成人における重要な他者との関係のとり方を規定する要因であることについての実証的研究が進められ、知見の蓄積が行われてきた。成人における愛着様式の測定には、Mainらによって作成された成人用アタッチメントインタビューや、現時点における他者との関係のとり方等をたずねる自己評定式尺度 (Hazan & Shaver, 1987; Bartholomew & Horowitz, 1991; Simpson, Rholes & Nelligan, 1992; Feeney, 1994) が用いられ、愛着様式と行動様式との関連性についてのほぼ一貫した知見が提示されてきている。自己評定式尺度は、他者に対する否定的なイメージをもち (Bartholomew & Horowitz, 1991)、親しい関係を回避するという「回避性」と (Simpson et al., 1992; Feeney, 1994)、自らに対する否定的なイメージから (Bartholomew & Horowitz, 1991)、関係崩壊への不安をもつという「関係不安」(Simpson et al., 1992; Feeney, 1994) の2次元構成へと集約されてきている。これらの次元と対人関係様式との関連をみると、これら2側面が共に低い「安定型」の個人は親密な他者との関係における葛藤状況においても建設的な行動を示しやすく、「回避性」や「関係不安」の高い個人は否定的な行動を示しやすいこと (Pietromonaco et al. 2004)、また、自らの特性を他者に投影しやすいこと (Mikulincer & Horesh, 1999) が報告されている。特に「関係不安」が高いほど、葛藤状況が自らに対する脅威と知覚されるために (Kobak, Cole, Ferenz-Gillies, Fleming & Gamble, 1993) 対立的な行動をとりやすく、相手に対する心理的虐待も生じやすいことや (Babcock, Jacobson, Gottman & Yerington, 2000)、対立状況を深刻化させやすいこと (Campbell, Simpson, Boldry & Kashy, 2005) が見出されている。

本研究では、夫婦間において葛藤が生じる状況を特定し、そこでのコミュニケーション・スタイルを測定す

る尺度の作成を試みる。夫婦が第1子誕生後に夫婦関係の危機を体験する (Belsky, Spanier, & Rovine, 1983; Belsky & Rovine, 1990; Wallace & Gotlib, 1990; 伊藤・別府・宮本, 1998) という報告から、第1子誕生の前後に焦点を置き、この時期の夫婦の変化を捉えるための葛藤生起場面におけるコミュニケーション・スタイル尺度を作成する。また、成人愛着様式との関連から本尺度の妥当性を検討する。

なお、本研究におけるコミュニケーションの定義は、言語及び非言語によって伝えられるメッセージの伝達であり、相互作用のプロセスを育むものである (佐藤, 1986) とした。

方法と結果

研究1. 葛藤生起場面における夫婦間コミュニケーション・スタイル尺度の作成

1) 葛藤生起場面の特定

調査期間：2000年6月

方法：友人・知人を通して、婚姻期間が15年以下の夫婦20組 (内、妻のみ6名) を対象として、自由記述式による質問紙を配布した。質問項目は、配偶者とのコミュニケーションでイライラするのはどのような時か、孤独を感じるのはどのような時か、さらに葛藤場面に内包されると考えられる関係を深化させる側面を考慮し (Pietromonaco et al., 2004) 通いつていると感じるのはどのような時かについて回答を求めた。回収率は妻が80%、夫が36%であった。平均年齢は妻・夫ともに35歳 (分布：妻28-41歳、夫31-42歳) であった。

結果：「イライラする時」では、「頼んだことをなかなかやってくれない時」や「出かけようと誘ってもあまり乗り気ではない様子を見せる時」など、要求をした時の配偶者の対応に関する記述が最も多く全体の回答数35件中20% (7件)、続いて「話しかけているのに生返事ばかりで一方通行」、「自分の話を聞いているのか分からない」といった話しかけ場面の対応に関する記述が17% (6件)、子どもへの対応の仕方に関する記述が14% (5)、家事分担に関する記述が11% (4件) であった。これらの育児や家事分担の仕方についての不満感を示唆する記述は、配偶者への要求行動と関連するものと思われた。

また、「孤独を感じる時」では「悩み事を相談しても思うような返事をしてくれない」など話しかけに対する無関心な態度を示された時が全体の回答数14件のうちの21% (3件)、「けんかした時」など意見の対立場面に関する記述が14% (2件) であった。

「気持ちが通いつていると感じる時」では、「出来事に対して同じような事を思っている時」など、考えや思いの共有場面が全体の回答数33件中21% (7件) みられた一方で、「意見が合わなくても話し合って理解し合った時」や「悩みや問題について十分話し合いができた時」といった夫婦間の齟齬を話し合いにより解決し相互の理解を深めた時についての記述も18% (6件) みられ、夫婦間の対立を生起させるような場面が相互理解を深める機会でもあることがうかがえた。

要求場面における配偶者の対応にもっともイライラ感を感じるという結果は、先行研究における「要求-回避コミュニケーション」と一致するものであり、またこの時期は子どもの誕生によって妻の家事分担の比重が高まり、妻の夫に対する要求行動が多くなると考えられることから、夫婦間の葛藤生起場面を配偶者が自分に要求行動を行ってきた時/配偶者に対して要求行動を行った時と設定した。

2) 尺度項目の決定

調査期間：2000年10月~11月および2003年8月~10月

対象：婚姻期間15年以下の夫婦865組

方法：本学および出身校の卒業生名簿より408名を抽出し、依頼状を添えて、郵送にて配布した。また友人・知人を通して75部、および都内3箇所の幼稚園と保育所1箇所にて311部配布した。さらに2003年には都内保健所における母親学級にて依頼し、71部配布した。回収率は42.3% (366部) であり、婚姻期間が15年以下で夫婦双方から回答が得られ欠損値の少ない327組を分析の対象とした。

対象者の属性：婚姻期間の平均は5.3年 (2年未満14.7%、2年以上4年未満22.3%、4年以上6年未満19.9%、6年以上8年未満18.3%、8年以上10年未満12.2%、10年以上12.5%)、子どものいる夫婦は70.0%であった (子ども人数：1人30.3%、2人32.7%、3人以上7.0%)。

妻の平均年齢は31.5歳（分布23-44歳、内訳25歳以下3.4%、26-30歳37.9%、31-35歳44.0%、36歳以上14.7%）、夫は34.1歳であった（分布20-51歳、内訳25歳以下1.8%、26-30歳17.8%、31-35歳48.3%、36-40歳22.3%、41歳以上9.8%）。

妻の56.0%は家事専業であり、パートタイム就労が13.5%、フルタイム就労が21.7%、その他が8.9%であった。

最終学歴は、妻では中高卒18.0%、専門学校・短大卒24.5%、大学卒48.0%、その他9.5%であり、夫では中高卒13.1%、専門学校・短大卒9.2%、大学卒60.2%、その他17.4%であった。

結果：葛藤生起場面におけるコミュニケーションは対人関係における葛藤状況への言語・非言語的対処と捉えられることから、コーピングと類似するものであると考え、コーピングに関する研究（神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・板野、1995；原口・尾関・津田、1991；坂田、1989）を参考にして配偶者の要求場面における対応様式を問う項目を構成し、自らの対応（自己評定）及び配偶者の対応（配偶者に対する評定、以下配偶者評定とする）について「あてはまらない」(1) から「あてはまる」(4) までの4件法で回答を求めた。妻と夫のデータをそれぞれ最小の固有値を1、最尤法プロマックス回転を用いて因子分析を行ったところ、構造的に大きな差異は見られなかったことから、妻・夫を合わせた654名のデータにて再度同様の分析を行った。共通性が.16に満たない項目や多因子に高い負荷量を示した項目を除外して項目を整備し、後続因子との関係により累積説明率が59.9%（自己評定）、62.5%（配偶者評定）を示した20項目、4因子解を適切と判断した。表1及び2に示したように、第4因子は第2因子や第3因子と中程度の相関が見られたが（ $r=.41-.53$ ）、この因子は先行研究における回避的コミュニケーションと類似した側面を持つものであり、独立した因子として捉えることが重要であると判断し、このまま残した。

第1因子（7項目）は「気をまぎらわせるようなことをいう」、「話題を変える」などの夫婦間の衝突を避け、同時に話し合いも避ける行動であり、配偶者の気持ちをなだめる行動であることから「なだめ」と命名した。第2因子（5項目）は「怒って夫／妻に文句をいう」、「夫／妻を責める」など、夫婦間の対立をもたらす行動であることから「対立」とした。第3因子（4項目）は「お互いの意見を出して話し合う」、「解決策を考える」というような問題に向き合い、話し合いを促す行動として「問題の取組」とした。最後に第4因子（4項目）は「何も言わない」、「気のない返事をするだけ」といった、第1因子と同様に夫婦間の対立も話し合いも避ける行動であるが、配偶者との関わり自体を避ける行動と捉えられることから「没交渉」と命名した。信頼性係数 α は、自己評定、配偶者に対する評定共に、各因子で.72-.86の高い値が得られた。

表1 夫婦間コミュニケーション・スタイル尺度（自己評定）の因子分析結果（N=654）

項目	「なだめ」 $\alpha = .81$	「対立」 $\alpha = .82$	「問題取組」 $\alpha = .77$	「没交渉」 $\alpha = .72$
気を紛らわせるようなことを言う	0.818	-0.025	0.098	-0.061
話題を変える	0.751	-0.026	-0.070	0.065
機嫌を取ろうとする	0.713	-0.114	0.135	0.004
夫（妻）の機嫌を直すような事を言う	0.588	-0.183	0.217	-0.051
たいしたことではないと言う	0.521	0.105	-0.126	0.011
つまらないことだと言う	0.445	0.286	-0.050	0.088
そのうちなんとかなると言う	0.444	0.063	-0.165	-0.013
怒って夫（妻）に対して文句を言う	0.058	0.865	-0.052	-0.159
夫（妻）を責める	0.003	0.815	0.033	-0.108
機嫌が悪くなる	-0.133	0.670	0.137	0.197
以前の夫（妻）の過ちを持ち出す	0.042	0.608	0.033	-0.135
嫌な顔をする	-0.098	0.507	0.066	0.278
問題の原因を説明する	-0.015	0.181	0.730	-0.025
解決策を考える	-0.009	-0.034	0.725	0.053
その事の妥協点を見出そうとする	0.074	0.012	0.659	0.119
お互いの意見を出して話し合おうとする	-0.018	0.029	0.647	-0.156
何も言わない	-0.078	-0.138	0.090	0.878
気のない返事をするだけ	0.040	-0.017	-0.035	0.689
他のことに夢中になり視線を合わせない	0.198	0.115	-0.137	0.375
他の部屋へ行くなどその場からいなくなる	0.214	0.185	-0.042	0.303
寄与率（%）	23.41	15.34	12.02	6.13
因子間相関				
		「対立」		
			「問題の取組」	
				「没交渉」
		-0.165	-0.248	-0.477
		-0.013	0.407	
		0.390		

研究 2. 夫婦間コミュニケーション・スタイル尺度の妥当性の検討

調査時期：2003年 7月～2005年 5月

対象：第 1 子妊娠期の夫婦400組

方法：調査協力の同意を得た都内 3 箇所の保健所において、母親学級・両親学級への出席者に質問紙調査への協力を求めた。研究の主旨や方法、協力の任意性及びプライバシーの保護について口頭及び依頼文にて説明後、調査票を配布して郵送によって回答を得た。回収率は57%（232組）であった。第 2 子目以降を妊娠中の夫婦 4 組を除く妻228名、夫217名を分析の対象とした。

対象者の属性：結婚平均年数は2.7年（分布0-17年、内訳 1 年未満23.7%、1 年以上 3 年未満40.4%、3 年以上 5 年未満15.8%、5 年以上18.9%、無回答1.3%）、妊娠平均月数は7.7ヶ月（分布4-10ヶ月）であった。

平均年齢は、妻では30.4歳（分布17-45歳、内訳25歳以下11.0%、26-30歳以下40.8%、31-35歳35.1%、36歳以上12.7%、無回答0.4%）、夫では33.1歳であった（分布21-54歳、内訳25歳以下5.5%、26-30歳27.2%、31-35歳41.5%、36歳以上25.8%）。

最終学歴は、妻では中学・高校卒業19.7%、短大・専門学校卒業50.9%、4 年制大学以上28.9%であり、夫では中学・高校卒業24.0%、短大・専門学校卒業20.7%、4 年制大学以上55.3%であったことから、学歴が比較的高い対象であるといえよう。

妊娠期における妻の就業の割合は33.0%であり、家族形態は夫婦のみの核家族が92.9%を占めていた。また、夫の年収を選択式にたずねたところ、400万円未満28.5%、400-700万円未満55.5%、700万円以上が16.1%、無回答2.7%の割合であった。

表 2 夫婦間コミュニケーション・スタイル尺度（配偶者評定）の因子分析結果（N=653）

項目	「なだめ」 α = .84	「対立」 α = .86	「問題取組」 α = .83	「没交渉」 α = .78
私の気を紛らわせるようなことを言う	0.844	0.005	-0.017	-0.102
私の機嫌を取ろうとする	0.740	-0.000	0.105	-0.026
私の機嫌を直すような事を言う	0.721	-0.064	0.153	-0.109
話題を変える	0.666	0.016	-0.105	0.119
そのうちなんとかかなと言う	0.477	-0.109	0.047	0.293
たいしたことではないと言う	0.460	0.063	-0.050	0.269
つまらないことだと言う	0.392	0.294	-0.045	0.212
私のことを責める	0.037	0.896	-0.033	-0.165
怒って私に対して文句を言う	-0.003	0.830	-0.009	-0.040
以前の私の過ちを持ち出す	0.121	0.779	-0.056	-0.234
機嫌が悪くなる	-0.234	0.634	0.095	0.303
嫌な顔をする	-0.157	0.505	0.113	0.384
お互いの意見を出して話し合おうとする	-0.027	0.040	0.767	-0.111
問題の原因を説明する	0.023	0.064	0.742	-0.048
解決策を考える	-0.019	-0.073	0.736	0.017
その事の妥協点を見出そうとする	0.135	-0.037	0.671	0.079
何も言わない	-0.064	-0.163	-0.006	0.842
気のない返事をするだけ	0.105	-0.101	-0.029	0.752
他のことに夢中になり視線を合わせない	0.185	0.095	-0.048	0.515
他の部屋へ行くなどその場から離れる	0.130	0.222	-0.027	0.410
寄与率 (%)	27.39	19.70	9.64	5.75
因子間相関				
「対立」	0.042			
「問題の取組」	0.199	-0.378		
「没交渉」	0.304	0.532	-0.448	

結果

1) 外部妥当性の検討

子どものいない夫婦においても夫婦間コミュニケーション・スタイル尺度が一般化しうるかを検討するため、欠損のない妻226名、夫215名のデータを用いてAmosによる確認的因子分析を行った。パス係数の低い項目を外して分析を行い、4因子15項目からなるモデルを最適と判断した（自己評定：GFI=.91、RMSEA=.083；配偶者評定：GFI=.91、RMSEA=.082）。このことから、この尺度が子どものまだいない夫婦でも般化が可能であることが確認された。信頼性係数 α 値は、自己評定尺度における「問題の取組」が.63であった他は、いずれの因子においても.71-.83の高い値が得られた。なお、尺度は「全くあてはまらない」(1) から「とてもよくあてはまる」(5) までの5件法で回答を求めている。妻・夫それぞれの各変数の構成項目を単純加算平均した合成変数を作成し分析に用いた。

表3 妊娠期における夫婦間コミュニケーション・スタイル尺度の確認的因子分析

因子	項目	パス係数（標準化係数）	
		自己評定 N=441(妻 226、夫 215)	配偶者評定 N=438 (妻 227、夫 211)
「なだめ」	気を紛らわせるようなことを言う	0.783	0.739
	話題を変える	0.800	0.772
	機嫌をとろうとする	0.609	0.641
	たいしたことではないという	0.536	0.508
「対立」	怒って夫(妻) / 私に文句を言う	0.752	0.820
	夫(妻) / 私を責める	0.699	0.796
	機嫌が悪くなる	0.729	0.747
	嫌な顔をする	0.638	0.636
「問題取組」	お互いの意見を出して話し合おうとする	0.825	0.744
	解決策を考える	0.549	0.727
	問題の原因を説明する	0.446	0.535
「没交渉」	他の部屋へいくなどその場から離れる	0.570	0.614
	何も言わない	0.652	0.628
	気のない返事をするだけ	0.640	0.724
	他のことに夢中になり視線を合わせない	0.589	0.799

2) 弁別的妥当性の検討

先行研究より、次の仮説が成り立つ。

不安定な愛着を持つ者（関係不安得点・回避性得点が高い）のほうが、安定した愛着を持つ者（関係不安得点・回避性得点が高い）よりも夫婦間コミュニケーション・スタイル尺度における自己評価得点及び配偶者に対する評価得点共に、「なだめ」「対立」「没交渉」得点が高く「問題の取組」得点が低いだろう。

① アタッチメント得点の作成

Feeneyら（1994）が作成した成人アタッチメント尺度（15項目）を、バックトランスレーションを行って和訳し、妊娠期の夫婦63組にて予備調査を行った（回収妻31名・夫27名、回収率46%）。「全く当てはまらない」（1）から「とてもよく当てはまる」（5）までの5件法で回答を求めた。2因子を想定した最尤法プロマックス回転による因子分析を行い、項目の整備を行って11項目を本調査に用いた。欠損のない妻226名、夫212名のデータを基に、妻・夫で多母集団の確認的因子分析を行ったところ、2因子9項目から成るモデルがGFI=.90、CFI=.82、RMSEA = .086を示した。 χ^2 値は有意であったが、GFIの採択基準を満たしたことから（豊田、1998）採用すると判断した。

「回避性」項目は「人に頼ることが苦手な方だ」、「誰かから親しくされると緊張する」、「親しくすることに居心地の悪さを感じる」、「誰か他の人に親しくされすぎても不快に思うことはない（逆転項目）」、「人との付き合いは深入りするの好きではない（筆者付加）」の計5項目、「関係不安」項目は「人は私が親しくなろうとすると嫌がって避ける」、「夫（妻）と一緒にいたくないのではと不安になる」、「夫（妻）が私を愛していないのではと不安になる」、「見捨てられるのではないかと不安になる」の4項目で、信頼性係数 α は、「回避性」が.65、「関係不安」が.74であった。妻・夫それぞれ、各変数の構成項目を単純加算平均した合成変数を作成して分析に用いた。妻と夫それぞれの夫婦間コミュニケーション尺度及び成人愛着様式の各変数の記述統計量を表4に示した。

表4 各変数の記述統計量

		M	SD	Min	Max
妻自己評定 (N=228)	「なだめ」	2.38	0.70	1.00	4.25
	「対立」	2.64	0.79	1.00	5.00
	「問題の取組」	3.82	0.62	1.67	5.00
	「没交渉」	2.13	0.71	1.00	3.75
妻→夫評定	「なだめ」	2.57	0.83	1.00	5.00
	「対立」	2.16	0.79	1.00	5.00
	「問題の取組」	3.49	0.77	1.33	5.00
	「没交渉」	2.27	0.83	1.00	5.00
夫自己評定 (N=215)	「なだめ」	2.88	0.77	1.00	4.50
	「対立」	2.28	0.74	1.00	4.25
	「問題の取組」	3.85	0.61	2.33	5.00
	「没交渉」	2.24	0.71	1.00	4.25
夫→妻評定	「なだめ」	2.40	0.72	1.00	4.50
	「対立」	2.52	0.90	1.00	5.00
	「問題の取組」	3.49	0.77	1.33	5.00
	「没交渉」	2.10	0.76	1.00	5.00
妻 (N=228)	回避性	2.68	0.66	1.00	4.25
	関係不安	1.82	0.67	1.00	4.25
夫 (N=217)	回避性	2.70	0.71	1.00	4.80
	関係不安	1.78	0.65	1.00	3.75

② 仮説の検討：コミュニケーション・スタイル尺度各因子得点の愛着（回避性／関係不安）得点の高低による効果

成人愛着様式の各変数に性差が見られるか否かをt検定によって検討したところ、「回避性」 $t(441)=.33$ 、「関係不安」 $t(441)=-.59$ で、いずれも有意差が得られなかったことから、妻夫込みの平均値（回避性2.69、関係不安1.80）より1SD（回避性.764、関係不安.657）以下を低群、1SD以上を高群として、コミュニケーション・スタイル尺度の各因子との関連をt検定を用いて検討した。

その結果、表5に示すように、夫では関係不安の群別の効果及び回避性の群別の効果ともに同様の結果を示した。高群は低群よりも自己評定において「対立」及び「没交渉」が有意に高く（〔関係不安〕「対立」 $t(79)=-2.93$, $p<.01$ ；「没交渉」 $t(79)=-2.54$, $p<.05$ ；〔回避性〕「対立」 $t(83)=-3.94$, $p<.001$ ；「没交渉」 $t(83)=-3.81$, $p<.001$ ）、「問題の取組」が有意に低い（〔関係不安〕 $t(79)=2.59$, $p<.05$ ；〔回避性〕 $t(83)=2.06$, $p<.05$ ）。また妻のコミュニケーション・スタイルに対する評定においても「対立」や「没交渉」が有意に高く（〔関係不安〕「対立」 $t(79)=-2.78$, $p<.01$ ；「没交渉」 $t(79)=-3.83$, $p<.001$ ；〔回避性〕「対立」 $t(83)=-3.50$, $p<.01$ ；「没交渉」 $t(83)=-2.58$, $p<.05$ ）、「問題の取組」が有意に低かった（〔関係不安〕 $t(79)=2.25$, $p<.05$ ；〔回避性〕 $t(83)=3.09$, $p<.01$ ）。

他方、妻では関係不安と回避性のコミュニケーション・スタイルとの関連に違いが見られた（表6参照）。まず、関係不安得点の高低による群別の効果は自己評定の「なだめ」「対立」「没交渉」において顕著であり、関係不安高群の方が低群よりもこれらの3変数にて有意に高いことが確認された（「なだめ」 $t(79)=-2.42$, $p<.05$ ；「対立」 $t(79)=-3.27$, $p<.01$ ；「没交渉」 $t(79)=-4.07$, $p<.001$ ）。また、夫のコミュニケーション・スタイルに対する評定においても「対立」と「没交渉」において関係不安高低の群別の効果が0.1%水準で有意であった（「対立」 $t(79)=-4.27$ ；「没交渉」 $t(79)=-3.69$ ）。しかし、回避性得点の群別の効果は、夫のコミュニケーション・スタイルに対する評定にて、「なだめ」と「対立」に10%水準での有意傾向が示されたのみであった（「なだめ」 $t(88)=1.84$ ；「対立」 $t(88)=-1.95$ ）。

表5 夫のコミュニケーション・スタイルの関係不安及び回避性の高低による効果

			関係不安				回避性			
			N	M	SD	t (79)	N	M	SD	t (83)
夫自己評定	「なだめ」	低	44	2.91	0.85	-0.73	43	2.63	0.86	-1.51
		高	37	3.04	0.75		42	2.90	0.79	
	「対立」	低	44	1.93	0.68	-2.93 **	43	1.98	0.77	-3.94 ***
		高	37	2.39	0.73		42	2.61	0.70	
	「問題の取組」	低	44	4.08	0.70	2.59 *	43	4.04	0.63	2.06 *
		高	37	3.69	0.63		42	3.75	0.66	
	「没交渉」	低	44	2.09	0.81	-2.54 *	43	1.91	0.70	-3.81 ***
		高	37	2.51	0.69		42	2.51	0.74	
夫→妻評定	「なだめ」	低	44	2.20	0.79	-1.75 †	43	2.17	0.80	-1.12
		高	37	2.50	0.69		42	2.36	0.76	
	「対立」	低	44	2.18	0.92	-2.78 **	43	2.15	0.86	-3.50 **
		高	37	2.75	0.93		42	2.82	0.92	
	「問題の取組」	低	44	3.66	0.81	2.25 *	43	3.66	0.79	3.09 **
		高	37	3.29	0.63		42	3.14	0.76	
	「没交渉」	低	44	1.81	0.74	-3.83 ***	43	1.83	0.68	-2.58 *
		高	37	2.47	0.81		42	2.27	0.89	

† .10>P>.05, *P<.05, **P<.01, ***P<.001

表6 妻のコミュニケーション・スタイルの関係不安及び回避性の高低による効果

			関係不安				回避性			
			N	M	SD	t (79)	N	M	SD	t (88)
妻自己評定	「なだめ」	低	34	2.10	0.61	-2.42 *	45	2.36	0.74	0.63
		高	47	2.47	0.71		45	2.26	0.85	
	「対立」	低	34	2.40	0.75	-3.27 **	45	2.62	0.87	0.09
		高	47	2.94	0.72		45	2.60	0.87	
	「問題の取組」	低	34	3.89	0.76	1.73 †	45	3.91	0.72	1.18
		高	47	3.65	0.53		45	3.73	0.71	
	「没交渉」	低	34	1.82	0.70	-4.07 ***	45	1.96	0.73	-0.31
		高	47	2.48	0.74		45	2.01	0.78	
妻→夫評定	「なだめ」	低	34	2.21	0.80	-1.73 †	45	2.68	0.85	1.84 †
		高	47	2.52	0.82		45	2.36	0.81	
	「対立」	低	34	1.88	0.80	-4.27 ***	45	2.01	0.83	-1.95 †
		高	47	2.65	0.82		45	2.37	0.92	
	「問題の取組」	低	34	3.60	0.86	1.98 †	45	3.47	0.78	-0.31
		高	47	3.21	0.87		45	3.53	0.79	
	「没交渉」	低	34	1.90	0.75	-3.69 ***	45	2.18	0.78	-0.22
		高	47	2.54	0.77		45	2.22	0.89	

† .10>P>.05, *P<.05, **P<.01, ***P<.001

考 察

本研究では、成人期における夫婦間の葛藤生起場面を特定し、そこでのコミュニケーション・スタイルを測定する尺度を作成してその妥当性を検討した。その結果、4因子15項目から成る尺度が最適と判断され、婚姻期間15年までの夫婦で子どものいる・いないに関わらず援用しうることが確認された。また、成人愛着様式が不安定であれば配偶者からの要求に対して「話し合い」などの肯定的な対応が少なく、「対立」や「没交渉」という否定的な対応を取りやすいことが示されたことは、先行研究における知見と一致しており、本尺度の弁別的妥当性が一部確認されたといえよう。

但し、妻においては、成人愛着様式の側面である「回避性」とコミュニケーション・スタイルとの関連は顕著ではなかった。Creasey (2002) の研究では、不安定な愛着を示す女性が葛藤状況においてさえも肯定的な行動をとることが示されており、ジェンダーステレオタイプのために不安定な愛着であっても女性と男性とでは同様の行動様式が示されるとはかぎらないのだとPietromonacoら (2004) は述べている。本結果においても、このようなジェンダーの影響等が考えられるが、今回の分析では妻と夫のコミュニケーション・スタイルにおける差異を検討しておらず、今後は性差についても検討を加える必要があると思われる。

ところで、夫婦間コミュニケーション・スタイルの「なだめ」と成人愛着様式との顕著な関連は、妻の「関係不安」との関連における自己評定以外では示されなかった。配偶者との関係に不安を抱く妻ほど、配偶者との対立を避けるために用いるスタイルであると考えられる。しかし、「なだめ」は配偶者の要求への具体的な対処を避ける行動であると同時に、配偶者の情動を調整し、その場の雰囲気や和ませる側面もあることが推察される。このようなコミュニケーション・スタイルが夫婦の関係性を築いていく中で、どのような影響を示すのかについては、今後の検討課題である。

夫婦間のコミュニケーション・スタイルは今回の分析で示したように、夫婦間の関係性の関連要因の1つである成人愛着様式と関連するものである。だが、具体的に夫婦間の日々の関わりにおける相互作用を紡いでゆくのコミュニケーションであり、このコミュニケーションの変化を捉えることで、夫婦の関係性の変化が明らかになると考える。今後はこれらの夫婦間におけるコミュニケーション・スタイルがいかに夫婦の関係性の変化と関連し、また関係性を形成してゆくののかについて検討して行きたい。さらに、今回の分析では信頼性の検証が十分ではなく、今後、再検査信頼性等の検討を行う必要があると考える。

文献

- Babcock, J.C., Jacobson, N.S., Gottman, J.M. & Yerington, T.P. (2000). Attachment, Emotional Regulation, and the Function of Marital Violence: Differences Between Secure, Preoccupied, and Dismissing Violent and Nonviolent Husbands. *Journal of Family Violence*, 15(4), 391-409.
- Bartholomew, K. & Horowitz, L.M. (1991). Attachment Styles Among Young Adults: A Test of a Four-Category Model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61 (2) 226-244.
- Belsky, J. Spanier, G.B., & Rovine, M. (1983). Stability and Change in Marriage Across the Transition to Parenthood. *Journal of Marriage and the Family*, 45, 567-577.
- Belsky, J. & Rovine, M. (1990). Patterns of Marital Change across the Transition to Parenthood: Pregnancy to Three Years Postpartum. *Journal of Marriage and the Family*, 52, 5-19.
- Bowlby, J. (1969/1997). Attachment and Loss. Vol.1 Attachment. London: Pimlico.
- Campbell, L., Simpson, J.A., Boldry, J. & Kashy, D.A. (2005). Perceptions of Conflict and Support in Romantic Relationships: The Role of Attachment Anxiety. *Journal of Personality & Social Psychology*, 88(3), 510-531.
- Creasey, G. (2002). Associations Between Working Models of Attachment and Conflict Management Behavior in Romantic Couples. *Journal of Counseling Psychology*, 49, 365-375.
- Caughlin, J.P. & Huston, T.L. (2002). A Contextual Analysis of the Association between Demand/withdraw and Marital Satisfaction. *Personal Relationships*, 9, 95-119.
- Christensen, A. & Shenk, J.L. (1991). Communication, Conflict, and Psychological Distance in Nondistressed, Clinic, and Divorcing Couples. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 59(3), 458-463.
- Dixon, M. & Duck, S. (1993). Understanding Relationship Processes : Uncovering the Human Search for Meaning. in Steve Duck (ed.), *Individuals In Relationships*. SAGE Publications, London, 175-206.
- Feeney, J.A. (1994). Attachment Style, Communication Patterns, and Satisfaction across the Life Cycle of Marriage. *Personal Relationships*, 1, 333-348.
- Gordon, K.C., Baucom, D.H., Epstein, N., Burnett, C.K., & Rankin, L.A. (1999) The Interaction between Marital Standards and Communication Patterns: How Does It Contribute to Marital Adjustment? *Journal of Marital and Family Therapy*, 25(2), 211-223.
- Gottman, J.M. & Krokoff, L.J. (1989). Marital Interaction and Satisfaction: A Longitudinal View. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 57(1), 47-52.
- 原口雅治・尾関友佳子・津田彰 (1991) 大学生の心理的ストレス過程：ストレスフルイベントに対するコーピングの分析. 九州大学教養部カウンセリング学科論集, 5, 83-95.
- Hazan, C. & Shaver, P. (1987). Romantic Love Conceptualized as an Attachment Process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52(3), 511-524.
- Heavey, C.L., Layne, C., & Christensen, A. (1993). Gender and Conflict Structure in Marital Interaction: A Replication and Extension. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 61(1), 16-27.
- 平山順子・柏木恵子 (2001) 中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？ 発達心理学研究, 12 (3), 216-227.
- Huston, T. L., Caughlin, J. P., Houts, R. M., Smith, S. E. & George, L. J. (2001). The Connubial Crucible: Newlywed Years as Predictors of Marital Delight, Distress, and Divorce. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80(2), 237-252.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 (2006) 夫婦のコミュニケーションと関係満足度、心理的健康の関連. 家族問題相談研究 聖徳大学家族問題相談センター紀要, 4, 51-61.
- 伊藤規子・別府哲・宮本正一 (1998) 子どもの誕生による夫婦関係の変化に関する研究. 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学, 47 (1), 207-214.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・板野雄二 (1995) 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成. 教育相談研究, 33, 41-47.
- Kobak, R.R., Cole, H.E., Ferenz-Gillies, R., Fleming, W.S., & Gamble, W. (1993). Attachment and emotion regulation during mother-teen problem solving: A control theory analysis. *Child Development*, 64, 231-245.
- Mikulincer, M & Horesh, N. (1999). Adult Attachment Style and the Perception of Others: The Role of Projective Mechanisms. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76(6), 1022-1034.
- 永田忠夫 (1997) 夫婦間システムにおけるコミュニケーション行動測定尺度の作成—コミュニケーション・スタイルとコミュニケーション・スキル—. 愛知淑徳短期大学研究紀要, 36, 63-78.

- 永田忠夫 (1999) 良好な夫婦システムに影響を及ぼすコミュニケーション行動. 愛知淑徳短期大学研究紀要, 38, 1-21.
- Pietromonaco, P.R., Greenwood, D. & Barrett, L.F. (2004). Conflict in Adult Close Relationships: An Attachment Perspective. In *Adult Attachment: Theory, Research, and Clinical Implications*. Eds. W. Steven Rholes & Jeffrey A. Simpson. The Guilford Press: New York.
- Roberts, L.J. (2000). Fire and Ice in Marital Communication: Hostile and Distancing Behaviors as Predictors of Marital Distress. *Journal of Marriage and the Family*, 62, 693-707.
- 佐藤悦子 (1986) 家族内コミュニケーション. 勁草書房.
- 坂田成輝 (1989) 心理的ストレスに関する一研究—コーピング尺度 (SCS) の作成の試み. 早稲田大学教育学部 学術研究 (教育・社会教育・教育心理・体育学編), 38, 61-72.
- Simpson, J.A., Rholes, W.S. & Nelligan, J.S. (1992). Support seeking and support giving within couples in an anxiety-provoking situation: The role of attachment styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 434-446.
- Wallace, P.M. & Gotlib, I.H. (1990). Marital Adjustment during the Transition to Parenthood: Stability and Predictors of Change. *Journal of Marriage and the Family*, 52, 21-29.